【69】

氏　名（国籍）	洪（ほん）　榮（よん）珠（じゅ）（韓　国）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博　甲　第　4532　号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**日韓名詞連結の対照研究** －「の／의（ui）」の実現／非実現の問題を中心に－

主　査	筑波大学教授	博士（言語学）	沼　田　善　子
副　査	筑波大学教授	Ph. D.（言語学）	竹　沢　幸　一
副　査	筑波大学准教授		杉　本　　武
副　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	渡　邊　淳　也
副　査	筑波大学講師	博士（学術）	澤　田　浩　子

論　文　の　内　容　の　要　旨

本論文は，非叙述性名詞を対象に，日・韓両言語における名詞連結に関し，名詞同士が直接連結して現れる場合と，名詞と名詞の間に特定の要素－日本語の場合「の」，韓国語の場合「의（ui）」－を介して現れる場合を中心に，対照言語学的な立場から，両言語の名詞連結の異同が現れる際の先行名詞と後続名詞の環境を記述するものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

第1章　序論

第2章　先行研究の検討

第3章「の」,「의（ui）」の実現可否と意味役割

第4章「の」,「의（ui）」の実現可否と先行名詞の構造的位置

第5章　実現形／非実現形の選択－韓国語のBタイプを中心に－

第6章　結論

まず，第1章で本論文の目的と，研究の対象となる名詞連結の範囲について述べ，名詞連結の分類を行う。具体的には，日･韓両言語の名詞連結に対し,「の」と「의（ui）」の実現如何による対応関係を提示した上で，当該の名詞連結に対する文想定可能性によって，各々の言語における名詞連結の下位分類を行う。

続く第2章では，両言語における名詞連結に関する先行研究を大きく，意味論的，統語論的，語用論的側面からの研究の三つに分けて概観し，それぞれの研究と本論文との関連性を述べた後，本論文の位置づけを示す。

第3章では,「の」と「의（ui）」が実現しない場合の先行名詞と後続名詞の意味的環境を考察する。ここでは，先行名詞と後続名詞を当該の名詞連結に対して想定される文中の格関係で捉えている奥津（1975）の分析を修正・補完し，意味役割から名詞同士の関係を再分析し，次のことを明らかにする。

1　イディオム化の問題が係わっていると思われる「時間＋目標」関係の他は，いずれの言語においても，

先行名詞と後続名詞が「対象」という意味役割を中心に結合する。

2　韓国語の名詞連結に見られる「의（ui）」の実現可否の現象は，意味役割による結合関係において一定の傾向性が観察される。この際の傾向性は以下のとおりである。

「의（ui）」の実現が任意：「動作主－対象」，「所有者－対象」，「動作主－場所」，「時間－動作主」，「場所－動作主」，「時間－対象」「出発－対象」

「의（ui）」が実現不可能：「対象－共益者」，「対象－動作主」，「対象－場所」，「対象－起点」，「対象－目標」，「対象－手段」「手段－対象」

第4章では，文が想定できない名詞連結を中心に，後続名詞を主要部とする先行名詞の構造的位置を観察し，先行名詞の構造的位置と「の」，「의（ui）」の実現／非実現の関連性について，次のことを明らかにする。

1　両言語で「の」「의（ui）」の実現が必須の名詞連結は，先行名詞と後続名詞がそれほど緊密に連結しておらず，主要部となる後続名詞に対し，先行名詞は補部以外の位置にある。

2　韓国語で「의（ui）」が実現不可能な名詞連結は，先行名詞と後続名詞が緊密に連結していて，後続名詞（主要部）に対し，先行名詞は補部位置にある。

3　両言語で「の」と「의（ui）」の実現が任意の名詞連結は，先行名詞と後続名詞の構造的位置との間に一定の関連性が見られず，後続名詞（主要部）に対して先行名詞が補部位置にある場合と，そうでない場合の両方の可能性を持つ。

第5章では，第4章で構造的な位置から一定の傾向を見出せなかった「の」と「의（ui）」の実現が任意の名詞連結について，実現，非実現に影響を及ぼす要因を，主に韓国語を中心に語用論的側面から考察する。ここでは，先行名詞の修飾の可否及び先行名詞，後続名詞の省略の可否をテストに，韓国語では，「前提」と「焦点」が問題となる環境に置かれた場合，後続名詞が焦点となる場合に実現形となる一方，先行名詞が焦点となる場合には非実現形になる傾向を見せることを述べ，「의（ui）」の実現，非実現が，語用論的焦点のありかにより決定される現象として分析される可能性があることを示す。またこれに対し，日本語では，「の」の実現，非実現が前提と焦点により左右される現象ではないことを述べる。

最後に，第6章で各章の内容をまとめ，課題として残された問題について述べる。

審査の結果の要旨

日・韓両言語の対照において，その異同が問題となり，日本語教育，韓国語教育においても学習上の困難点として指摘されながら，従来，現象に対する分析観点の設定の難しさから，十分な研究が行われなかった名詞連結に果敢に取り組み，意味論的，統語論的，語用論的観点から総合的に研究しようとする本論文の目的は高く評価できる。また，研究の対象を非叙述性名詞に限定しつつも，多くの語例を精査した上で，両言語の異同を丹念かつ詳細に検討する徹底した観察に基づき，十全な記述を行おうとする本論文の意義は大きい。

一方，本論文では，名詞連結を「の」と「의（ui）」の実現，非実現という表層的な基準で分類したことにより，語彙レベルの複合名詞と句レベルで捉えるべき名詞連結を混在させたまま，分析を進めている恐れがあり，この点で，日本語，韓国語それぞれにおいて，こうした観点から名詞連結を再分類し，体系化した上で，両言語の対照を行うことで，より確度の高い研究とすることが望めるだろう。

また，第4章における考察でも，統語テストとして採用した「隣接性テスト」，「題目化テスト」には，必ずしも十分な信頼性が保証されない場合があり，容易なことではないが，他にテストとなる現象を求める等，さらに分析の精度を高める努力が期待される。

しかしながら，こうした課題を残しながらも，本論文の徹底した観察，記述からは，両言語を対照する上

で，興味深い多くの知見が見出され，中でも特に，日・韓両言語共に，「の」「의（ui）」が介在しない名詞連結の先行名詞と後続名詞が，それらに対し想定可能な文中の「対象」の意味役割を中心に結合するという指摘は，極めて興味深く，今後，中国語の名詞連結における「的」の介在可能性等，他の言語における名詞連結に研究の対象を広げる際にも，重要な知見となる。

本論文の著者は，今後，中国語との対照を視野に入れ，日・韓・中語の名詞連結の対照を行い，三言語の異同を総合的に捉えることを目指すと同時に，ここで得られる知見を日本語教育，韓国語教育，中国語教育に反映させていくことを目標とする。著者が本論文での課題を克服しつつ，今後さらに研究を深めることが期待される。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。